

(短報)

有明海湾奥部におけるミドリシャミセンガイの漁獲

伊藤史郎

Fishery Catch of *Lingula anatina* in the Inner Part of Ariake Sound

Shiro Ito

ミドリシャミセンガイ *Lingula anatina* は触手動物門、腕足類に属し、有明海では「メカジヤ」と呼ばれ、湾奥部では漁獲対象種であり珍味として親しまれている。しかし、その生息数は少なく、準絶滅危惧種に指定されている¹⁾。一方、生物学的には数億年前から生存している生きた化石としても知られている。食用とされながらも希少な生物である。このように貴重な本種資源を維持するためには、漁獲の実態を明らかにし、資源保護のための方策を検討する必要がある。そこで、本種の成長と成熟に関する調査研究²⁾において、1998年5月と7月に干潟表層の細長く伸びた生息孔の長さとしてそこに生息する本種の腹殻長を測定し(0.1mm単位)、漁業者が漁獲の目安とする生息孔の大きさについて検討した。次に、本種が漁獲物として取り扱われている福岡県柳川市の筑後中部魚市場にて(1998年10月26日)本種の腹殻長を測定し(0.1mm単位)、漁獲対象となっている大きさを推定した。さらに、2007年から2015年までの筑後中部魚市場における本種の取扱量について調べた。

筑後中部魚市場に水揚げされた本種の腹殻長組成をFig.1に示した。腹殻長組成から、漁業者は30mmから40mmを中心とする比較的大きなサイズの個体を対象に漁獲しているものと推察された。干潟表層の生息孔の長さとしてそこに生息する本種の腹殻長との関係をFig.2に示した。生息孔長(X,mm)と腹殻長(Y,mm)の間には、 $Y=0.932X+19.312$ ($R^2=0.346$)の関係式が算出された。干潟表層の生息孔の長さは概ね腹殻長の大きさに比例して大きくなっており、漁業者は経験的に生息孔の長さを目安に30mm以上の個体を漁獲しているものと推察された。2007年から2015年までの筑後中部魚市場に水揚げされた月別の取扱量をFig.3に示した。取扱量の推移をみると、3,4月から10,11月にかけて水揚げされており、その量は2010年の著しい増加年を除くと、ほぼ同様な傾向で推移している。

これらのことから、筑後川河口域を中心とした有明海湾奥部における本種の資源量は、現時点では加入量と漁獲圧が一定のバランスがとれた状況下にあると考えられ

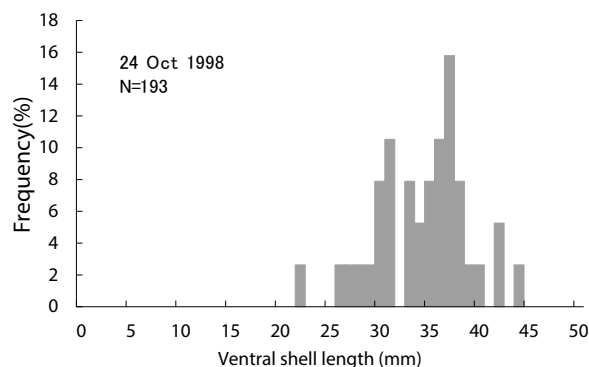


Fig.1 Size frequency distribution of samples of *Lingula anatina* in "Chikugo Chubu Uoichiba" in October 1998.

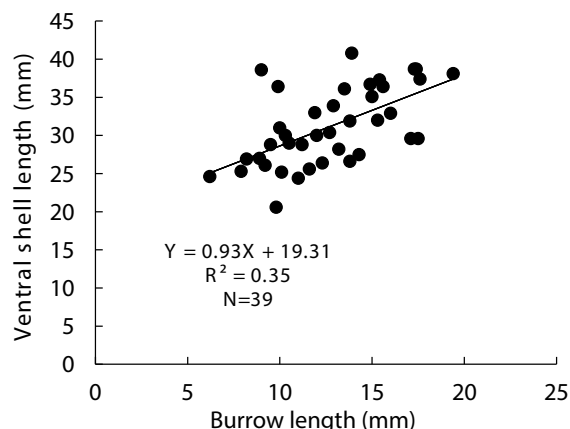


Fig.2 Relationship between the burrow length and ventral shell length of *Lingula anatina*.

る。ただ、主な漁獲時期が産卵期²⁾と推察される時期とかなることから、過度な漁獲圧により資源の減少に繋がることも危惧される。なお、筑後川河口域における本種の漁獲は徒歩獲りで行われている。徒歩獲りは、主に大潮干潮時(日中の約2時間)に目視により干潟表層の生息孔を確認し、長さ30mm程度の細長いヘラのような漁具を用いて生息孔を掘り起こして一個体ずつ採取する。このような漁獲手法が過度な漁獲圧に繋がっていない一つの要因と考えられる。

有明海の貴重な資源を後世に残すためには、過度な漁獲は控えるとともに、本種が生息する干潟域の生息環境の保全を図ることが重要と考える。

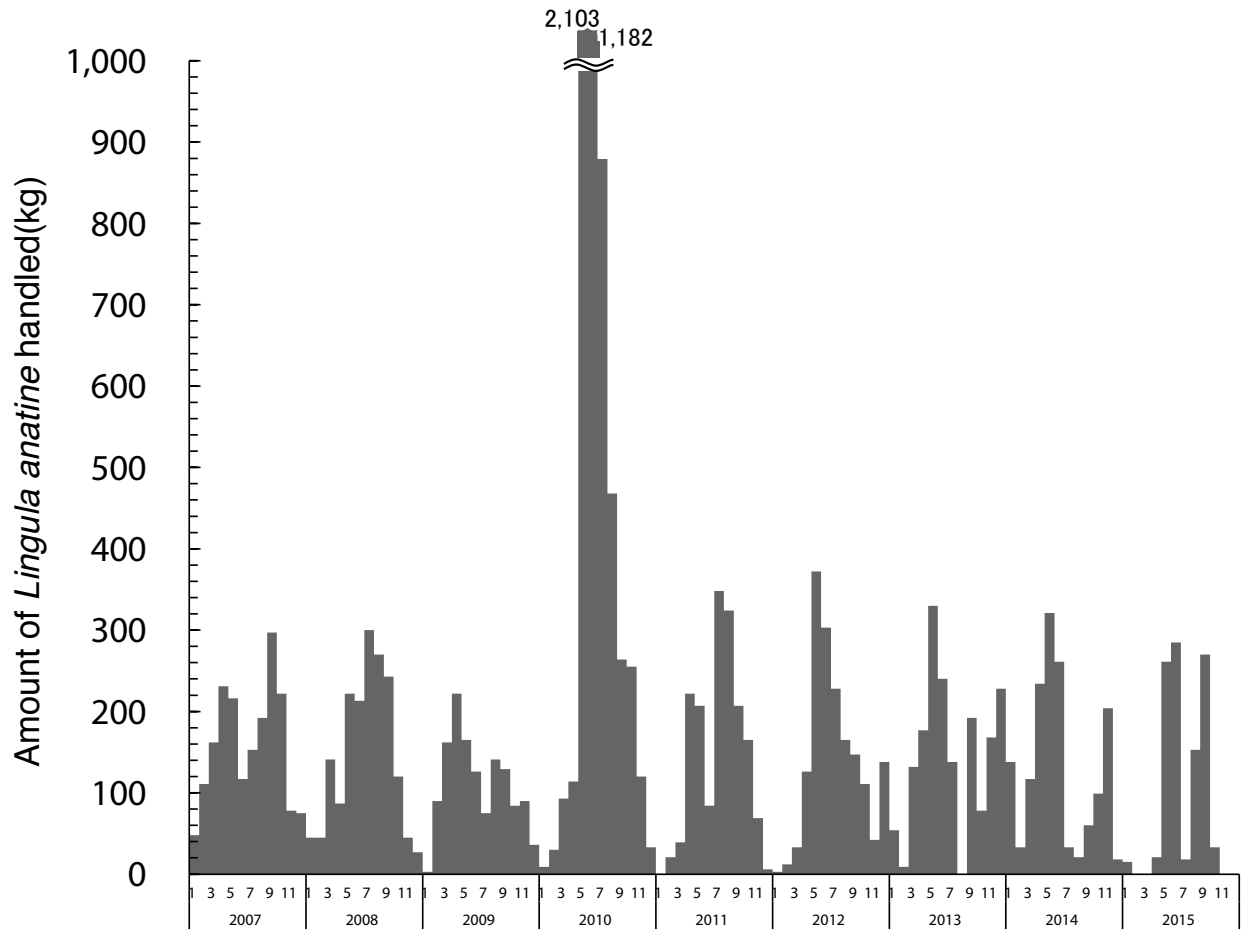


Fig.3 The amount of *Lingula anatina* handled in “ChikugoChubu Uoichiba” from 2007 to 2015.

文 献

- 1) 逸見泰久(2012):オオシャミセンガイ・ミドリシャミセンガイ. 干潟の絶滅危惧動物図鑑(日本ベントス学会編),pp.233-234.東海大学出版会,東京.
- 2) 伊藤史郎(2017):有明海湾奥部におけるミドリシャミセンガイの成長と成熟. 佐賀有明水振セ研報, (28),105-110.